

氏名	[4] 山際 彰 <small>やまぎわ あきら</small>
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	文博第 257 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	時を表す語彙の体系的な研究
論文審査委員	主査 教授 乾 善彦 副査 教授 日高 水穂 副査 准教授 森 勇太

## 論文内容の要旨

本論文は、日本語の語彙論の一環として時を表す語彙を取り上げ、その変遷と変遷の際に生じる変化の方向性について述べるものであり、具体的には、時を表す語彙が現代の体系を形成するまでの過程を、通史的な観点に基づいて示し、その中で、時を表す語彙体系の形成に強く作用する変化（またはその方向性）について明らかにしようとしたものである。全体は、五部、十三章からなる。

〈導入部〉では、本論の方法と時を表す語彙の外延と史的変遷を概観する（第 1 章、第 2 章）。〈第 I 部 “まとめり” としての時を表す語彙 I —近過去を表す語彙—〉では、「このごろ、ちかごろ、最近、近時」の史的変遷とそれぞれの語の関係を考察する。「このごろ」には「このほど、このじゅう」といった「この～」の類義語があるが、それらが衰退するのに対して、「このごろ」が時代を通じて安定して用いられることを明らかにし（第 3 章）、第 4 章では、「このごろ」と「ちかごろ」の文体差を明らかにする。第 5 章と第 6 章とでは、漢語「最近」と「近時」をとりあげ、近過去を表すのもっと多用される「最近」の成立過程を考察したうえで、「近時」との差異を明らかにする。〈第 II 部 “まとめり” としての時を表す語彙 II —近未来を表す語彙—〉では、「近日、近々」の変遷と両者の関係をとりあげ、「近日」が近過去、近未来の両方の用法から近未来へと収斂してゆく過程を明らかにしたうえで（第 7 章）、「近々（きんきん、ちかぢか）」の意味用法が、空間的意味から時間的意味に広がってゆく様相を記述する（第 8 章）。〈第 III 部 変化の方向性から見た時を表す語彙〉では、まず過去と未来の両方の意味を表しうる「さきざき」をとりあげ、類義の「あとあと、まえまえ、のちのち」との関係から、多義を文脈的に使い分ける意識から、「一意的に指示内容が決定される論理的表現の嗜好」によってもっぱら未来を表す用法に固定していったとする変化の方向性を明らかにし（第 9 章）、「端境」の変遷を通して「時間的意味から空間的意味への変化という、通常とは逆の変化の可能性もあるように見える現象について、それを否定する（第 10 章）。〈第 IV 部 “あつまり” としての時を表す語彙〉で

は、一資料のなかの時を表す語をすべて抜き出すという方法で、近世口語資料と近代口語資料との対比（第 11 章）、一つの外国作品の知識人層むけの翻訳資料と庶民層むけの翻訳資料との対比（第 12 章）を行う。最後に〈終結部〉に本論文のまとめと今後の展望を記す。

## 論文審査結果の要旨

本論文のもっとも評価すべき点は、語彙史の方法についての論者の姿勢である。近年、国立国語研究所のコーパス事業をはじめとして、さまざまなコーパスが整備され、語彙研究に大きな成果をもたらしている。語彙史の分野においても歴史コーパスの整備が進み、それを利用した研究も散見されるようになった。本論文は、多くのコーパスをその特徴をよく理解して、積極的に取り入れたものである。ともすると単に索引代わりの利用や、コーパス自体に懐疑的な発言も見受けられる中で、見事に語彙史研究の工具として使いこなしている点で、これからの語彙史研究に新たな展開を期待させる。なによりも、ただコーパスを利用するだけでなく、文献を博捜する従来の方法や、第IV部に見られる悉皆調査の方法も併用している点で、文献資料とコーパスとの新たな関係を考えようとする姿勢が高く評価できる。

次に、語彙史研究では当然のことでありながら、ともすれば忘れがちな、「語彙」（語の“まとまり”と“あつまり”）の意味が正確に認識されて、常に類義の語との関係に注意が払われていることである。単に「語誌」の記述にとどまらず、体系の変化ということに関心が払われている。まさに語彙史の研究である。さらに、語のさまざまな使用場を考えることによって、さまざまな位相差を問題にする。第3章においては使用者層という観点、第4章では口頭語的か文章語的かという観点、第5、6章では漢語と和語との文章中における位相という観点、第11章の資料差、第12章の享受者層の異なりといった具合である。このように、ひとつの語彙を多面的にとらえるには、資料の性格を正確に見極める必要がある。その点で、本論文に示されされた資料の運用は、的確である。

さらに、本論文では、時間のとらえ方という哲学的な方面や他言語における時間のとらえ方にも目くばりするという視野の広さも見逃せない。これも、時間語彙を対象とするならば当然のことであるが、単に語誌や多義語の使い分けという論文がまま見受けられる中であって、研究の足元を固めるといった基礎作りの点で、的確な作業がなされている。

最後に、本論文の発展性である。本論文に示されているように、「時間語彙」というのは、とてつもなく大きな集合である。本論文に取り上げられたのは、そのうちそれを構成する二つの小さな集合に過ぎない。このような確実な作業の積み重ねが、より大きな集合の語彙史研究となるだろう。それも、常に方法を意識しての作業に支えられてのことである。本論文のここかしこに、若さゆえの未熟さがみとめられはするものの、新たな方法を確立して語彙史研究に新局面を開くという点で、これからの展開がおおいに期待される。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。